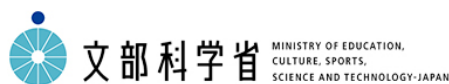


令和3年度採択「文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(調査分析)」



海外先進事例を通じた私立大学における ダイバーシティ推進モデルのための調査研究

Diversity Promotion Model in Private Universities through Advanced Overseas Cases

エンゲージメントとダイバーシティの 取り組みに関する調査（日独米）

同志社大学ダイバーシティ研究センター

2023年3月



概要

この報告書は、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究費実現イニシアティブ（調査分析）」の一環として行われた国際比較調査の結果をまとめたものである。

本調査は、各国の大学におけるダイバーシティ支援の現状についての比較分析を目的とし、2022年に実施された。日独米の大学に所属する教職員・学生にインターネットを通じてアンケート調査を行い、3か国合わせて計3205名から回答を得た。質問紙は、各大学のダイバーシティ支援の現状に関するものや、自身の意見に関する内容から構成されている。分析では、主に教職員からの回答を対象として、私立大学と国公立大学の意識比較や、年齢・性別による回答の傾向違いを明らかにした。

目次

1. 調査方法

1.1	方法と対象	3
1.2	質問紙	3
1.3	回答者の属性	5

2. 回答の分析

2.1	教員の回答の国際比較	11
2.2	学生の回答の国際比較	22

1. 調査方法

1.1 方法と対象

調査は日本、ドイツ、アメリカの3か国の大学に所属する学生および教職員を対象に、2022年1月～3月にかけてインターネットを通じて行われた。3か国の合計回答者は3205名で、その内訳は日本1027名、ドイツ1088名、アメリカ1090名となった。回答者の属性については、後節1.3に詳述する。なお、各国の名称については、ドイツ、アメリカ等の通称表記のほか、漢字略称表記（日、独、米）を用いることがある。

1.2 質問紙

本調査での質問項目は、表1および表2の通りである。大学で自身が置かれている状況に関する質問(Q1～Q4)、所属大学のダイバーシティ支援への取り組みに関する質問(Q5)、および各支援の重要性に関する質問(Q6)で構成されている。なお、多言語質問紙の作成に際しては、各言語を母語とする専門家によるチェックを行った。

表1 質問文（日本語）

質問文	
Q1	あなたの大学はあなたのことを大切にしていると思いますか。
Q2	あなたの大学にはあなたが助けを求めることができるメンバーがいますか。
Q3	あなたは大学で活躍したいですか。
Q4	あなたのスキルや能力はあなたの大学で評価されていますか。
Q5	あなたの大学は以下の取り組みを積極的に行っていると思いますか。
S1	障がい者支援
S2	ジェンダー平等
S3	多文化共生・国際理解
S4	LGBTQ支援
Q6	あなたは、大学が以下の取り組みを行うことはどれくらい重要だと思いますか。
S1	障害のある教職員のサポート
S2	障害のある学生のサポート
S3	LGBTQの学生のサポート
S4	LGBTQの教職員のサポート
S5	異なる国籍、人種の学生同士の交流
S6	異なる国籍、人種の教職員同士の協働
S7	女子学生の活躍推進
S8	女性研究者の活躍推進

表 2 質問文 (英語 / 独語)

質問文	
Q1	Do you think your university cares about you? / Haben Sie den Eindruck, dass Sie von Ihrer Universität wertgeschätzt werden?
Q2	Is there anyone at your college you can turn to for help? / Gibt es an Ihrer Universität Personen, an die Sie sich wenden können, wenn Sie Hilfe benötigen?
Q3	Do you want to be useful at your university? / Möchten Sie eine aktive Rolle an Ihrer Universität spielen?
Q4	Are your skills and abilities valued by your university? / Werden Ihre Fähigkeiten und Kompetenzen von Ihrer Universität geschätzt?
Q5	Do you think your university is actively engaged in the following initiatives? / Glauben Sie, dass Ihre Universität in folgenden Bereichen aktiv Initiativen setzt?
S1	Support for persons with disabilities / Unterstützung für Menschen mit Behinderung
S2	Gender equality / Geschlechtergleichstellung
S3	Multiculturalism and international understanding / Internationalisierung und Antirassismus
S4	LGBTQ support / Unterstützung für LGBTQ
Q6	How important do you think it is for universities to undertake the following initiatives? / Wie wichtig ist es Ihrer Meinung nach, dass Universitäten folgende Initiativen setzen?
S1	Support for faculty and staff with disabilities / Unterstützung für Lehrkräfte mit Behinderung
S2	Support for students with disabilities / Unterstützung für Studierende mit Behinderung
S3	Support for LGBTQ students / Unterstützung für LGBTQ-Studierende
S4	Support for LGBTQ faculty and staff / Unterstützung für LGBTQ-Lehrkräfte
S5	Interaction among students of different nationalities and ethnicities / Austausch zwischen Studierenden verschiedener Nationalitäten und Ethnien
S6	Collaboration among faculty and staff of different nationalities and ethnicities / Zusammenarbeit zwischen Lehrenden verschiedener Nationalitäten und Ethnien
S7	Promotion of female students / Förderung von Studentinnen
S8	Promotion of female researchers / Förderung von Wissenschaftlerinnen und Forscherinnen

1.3 回答者の属性

1.3.1 全回答者の内訳

全回答者 3205 名について、属性の内訳を表 3 に示す。前述の通り、各国の回答者数に偏りはなく、いずれの国でも学生・教員を合わせて 1000 名超の回答を得た。学生・教員の内訳（表 4、図 1）をみると、各国とも学生からの回答が多く、教員や研究員はドイツで約 10%、日本とアメリカで約 20%であった。ただし、今回の調査では教員と学生の回答は別途分析し、両者の比較は行わないため、回答数の差自体に大きな問題はない。

また、各国の回答者の性別内訳およびその割合を表 5、図 2 に示す。男女比についても、3 か国ともに大きな偏りはなく、。なお、性別「その他」を選択した回答者も 3 か国すべてに存在したが、その割合はアメリカにおいて 1.7%、ドイツと日本においては 1%未満であり、全回答者に対して極めて少ない。ダイバーシティの観点からは多様な性自認についての調査は重要となるが、比較に十分な標本数を確保できていないため、今回の分析では性別「その他」の回答を比較分析から除外する。

表 3 各国回答者数の内訳 (単位:人)

独	日	米	計
1088	1027	1090	3205

表 4 学生・教員の内訳 (単位:人)

	独	日	米	計
学生	981	813	871	2665
教員・研究員	107	214	219	540

表 5 性別の内訳 (単位:人)

	独	日	米	計
女性	553	544	712	1809
男性	528	481	360	1369
その他	7	2	18	27

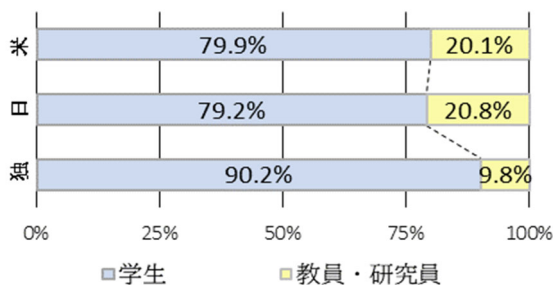


図 1 学生・教員の割合

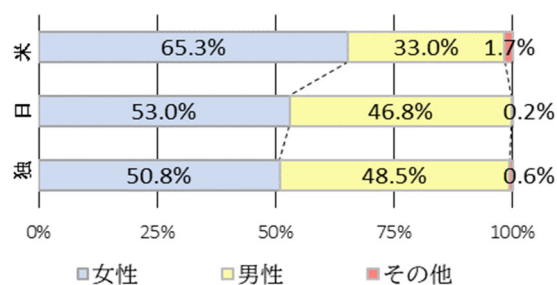


図 2 性別の割合

1.3.2 教員の内訳

教員（研究員含む）の性別構成（表 6、図 1）は、3 か国ともに男性の割合が多く、女性比率はドイツで 43.4%、アメリカで 35.8%、一番低い日本では 14.6%であった。内閣府の報告¹によると、令和 2 年の研究者に占める女性比率は、日本で 16.9%、アメリカで 33.7%であることから、この標本の性別比は母集団にかなり近い分布であると考えられる。

所属大学の設置区分（表 7、図 4）では、日本では私立と国立がほぼ 1:1 であるのに対し、歴史的に公立大学が多いドイツにおいては 9 割近くが国公立からの回答となった。「その他」の回答は各国ともに少なく、ドイツやアメリカにおいては教会系や自治系の大学が含まれると考えられるため、以降の分析においては私立大学に分類する。

表 6 【教員】性別の内訳（単位：人）

	独	日	米
女性	46	31	78
男性	60	182	140

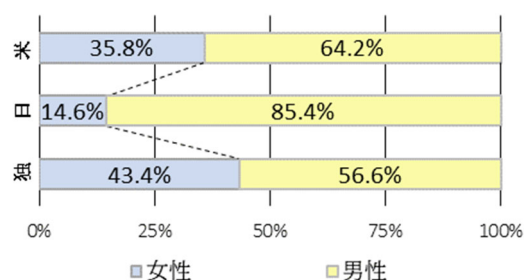


図 3 【教員】性別の割合

表 7 【教員】所属大学設置区分の内訳（単位：人）

	独			日			米		
	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計
私立	5	4	9	15	84	99	15	35	50
国公立	39	52	91	16	94	110	58	105	163
その他	2	4	6	0	4	4	5	0	5

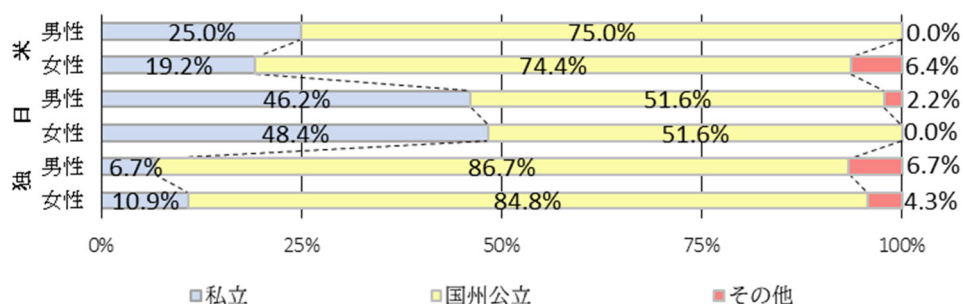


図 4 【教員】所属大学設置区分の割合

¹ 内閣府男女共同参画局 「令和 3 年版男女共同参画白書」 p.129

教員の年齢（表 8、図 5）および職位（表 9、図 6）をみると、日本の 50 歳以上の男性の割合が 62.1%と、目立って大きい。日本とアメリカを比べると、男性教員の職位構成がほぼ同じで、ともに教授と准教授の合計が 70%を超えている。しかし、アメリカの男性では 30～40 歳が約 80%を占めており、50 代以上は 5%未満である点が大きく異なる。また、アメリカの女性やドイツの男女で 29 歳以下の割合が高いのは、博士課程の学生が助手や研究員として大学に雇用され、教員として扱われることが多いためであると考えられる。同様に、日本の大学における講師は助教より上位職であるが、本調査では「その他」に含まれる等、国ごとの制度の違いに留意が必要である。

雇用形態（表 10、図 7）についても、教授・准教授職の割合の大きいアメリカと日本の男性教員で無期雇用の割合が高い。日本の女性教員とアメリカの女性教員、またドイツの男女ともに、無期雇用と有期雇用がほぼ半数ずつとなっており、各国間の差はあまりみられない。

各教員の専門分野（表 11、図 1）では、日本の男女ともほぼ半数が自然科学系の教員であった。またドイツでも男女の分野構成が類似している。なお、英語の質問紙では日独語で「文理融合・学際・複合」に相当する選択肢に、Arts and sciences という語が含まれているため、他の 2 か国とやや回答の傾向が異なった可能性がある。

表 8 【教員】年齢の内訳（単位：人）

	独			日			米		
	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計
29 歳以下	28	34	62	5	1	6	40	23	63
30～49 歳	14	17	31	17	68	85	35	111	146
50 歳以上	4	9	13	9	113	122	3	6	9

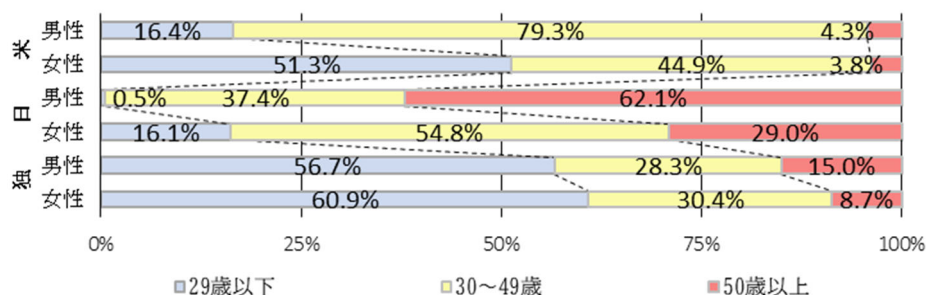


図 5 【教員】年齢の割合

表 9 【教員】職位の内訳 (単位:人)

	独			日			米		
	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計
教授	8	10	18	5	79	84	20	48	68
准教授	8	3	11	9	56	65	8	55	63
助教	11	17	28	6	19	25	6	19	25
研究員	10	19	29	1	6	7	10	5	15
その他	9	11	20	10	22	32	34	13	47

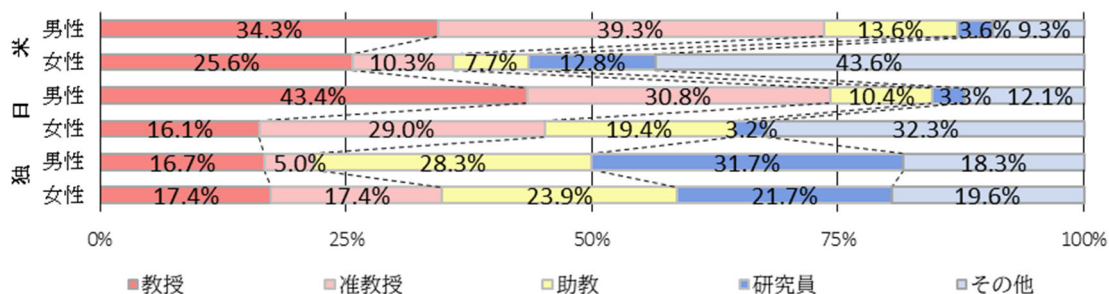


図 6 【教員】職位の割合

表 10 【教員】雇用形態の内訳 (単位:人)

	独			日			米		
	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計
無期雇用	23	26	49	18	143	161	37	122	159
有期雇用	23	34	57	13	39	52	41	18	59

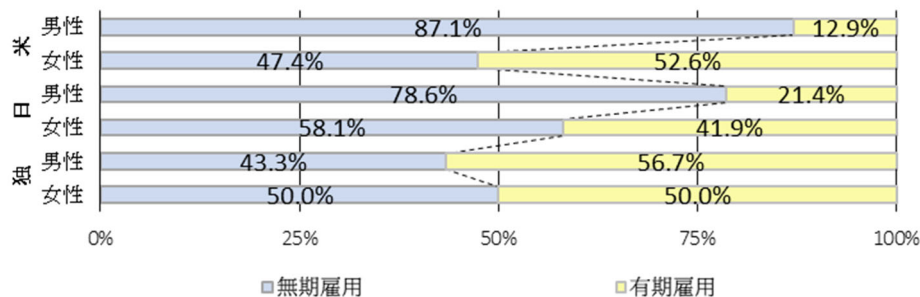


図 7 【教員】雇用形態の割合

表 11 【教員】専門分野の内訳 (単位:人)

	独			日			米		
	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計
人文科学	6	6	12	7	21	28	11	22	33
社会科学	15	23	38	4	39	43	18	71	89
自然科学	15	17	32	14	93	107	10	20	30
文理融合・ 学際・複合	3	9	12	3	13	16	20	17	37
その他	7	5	12	3	16	19	19	10	29

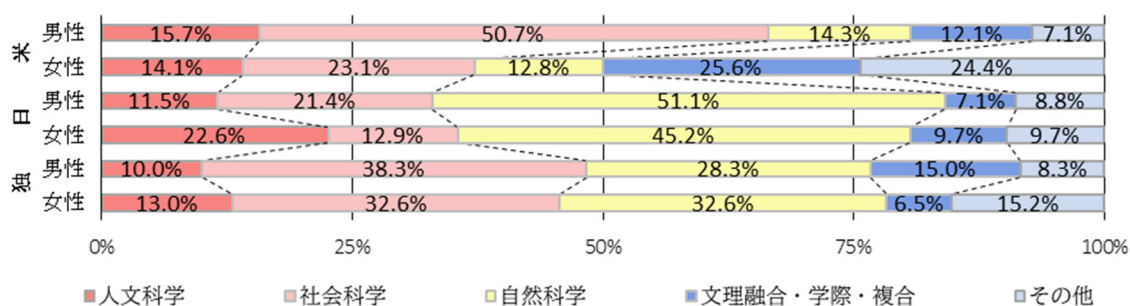


図 8 【教員】専門分野の割合

1.3.3 学生の内訳

学生（学部生、大学院生）の回答に関しては、本調査ではあまり詳細な属性を区別しないが、大学院生については国によって研究者や教員との境界があいまいなため、学部生と大学院生の回答を分けて分析する。在籍課程（表 12、図 9）をみると、大学院生の回答者はドイツで 315 名、日本で 95 名、アメリカで 205 名であった。それぞれの年齢構成は、表 13 および図 10 の通りである。

表 12 【学生】課程の内訳 (単位:人)

	独			日			米		
	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計	女性	男性	男女計
学部生	352	308	660	466	251	717	491	158	649
大学院生	155	160	315	47	48	95	143	62	205

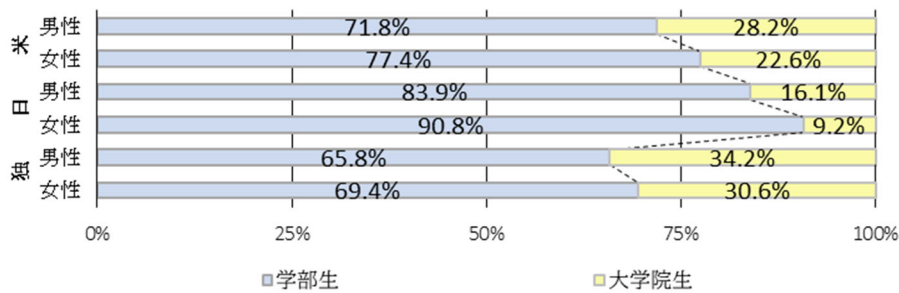


図 9 【学生】課程の割合

表 13 【学生】年齢の内訳 (単位:人)

	独		日		米	
	学部生	院生	学部生	院生	学部生	院生
15～19 歳	68	12	100	0	188	19
20～29 歳	437	199	552	75	391	142
30～39 歳	124	73	21	13	44	27
40～49 歳	23	19	22	6	17	9
50 歳以上	8	12	22	1	9	8

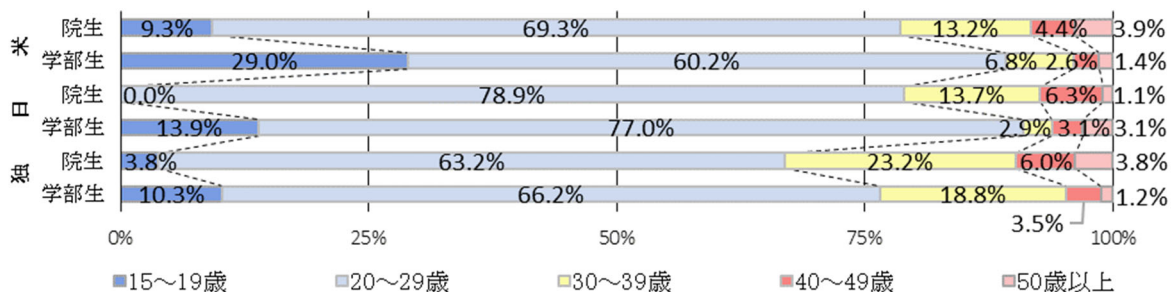


図 10 【学生】年齢の割合

2. 回答の分析

2.1 教員の回答の国際比較

2.1.1 自身の置かれている状況に関する質問

分析の対象となる質問項目（図 11）のうち、各国の教員が置かれている状況に関する質問 Q1～Q4 について、性別、大学設置区分、雇用形態、年齢ごとの回答を比較する。なお、前述の通り、性別「その他」を選択した回答者は比較から除外し、設置区分「その他」の大学に所属すると回答した回答者は私立大学に算入する。また、図表中の「国公立」表記には州立大学を含む。

自身の置かれている状況に関する質問

Q1 あなたの大学はあなたのことを大切にしていると思いますか
Q2 あなたの大学にはあなたが助けを求められることができるメンバーがいますか
Q3 あなたは大学で活躍したいですか
Q4 あなたのスキルや能力はあなたの大学で評価されていますか

所属大学の取り組みに関する質問

Q5 あなたの大学は以下の取り組みを積極的に行っていると思いますか

- 障がい者支援
- ジェンダー平等
- 多文化共生・国際理解
- LGBTQ支援

支援の重要性に関する質問

Q6 あなたは、大学が以下の取り組みを行うことはどれぐらい重要だと思いますか

障害のある教職員のサポート	障害のある学生のサポート
LGBTQの学生のサポート	LGBTQの教職員のサポート
異なる国籍、人種の学生同士の交流	異なる国籍、人種の教職員同士の協働
女子学生の活躍推進	女性研究者の活躍推進

図 11 【参考】質問項目一覧

Q1 あなたの大学はあなたのことを大切にしていますか

Q1 に対する回答（図 12）では、I～IVいずれの区分でも、日本の教員で男女ともに「思わない」の割合が独米に比べて多く、「思う」が少ない。さらに、「思う」と「どちらかといえば思う」の合計においても、大半の区分で日本のみ 50%を切っていることから、日本の教員の否定的な傾向がうかがえる。また、図 12.IIIをみると、日本では無期雇用教員に比べ、自身が大切にされていると考えている有期雇用教員の割合が低いことがわかる。これは雇用の安定を考えると当然のようにも思われるが、アメリカの有期雇用教員では「思う」と「どちらかといえば思う」の合計が 95%以上と、無期雇用教員よりも多く、日本と対照的な結果となった。

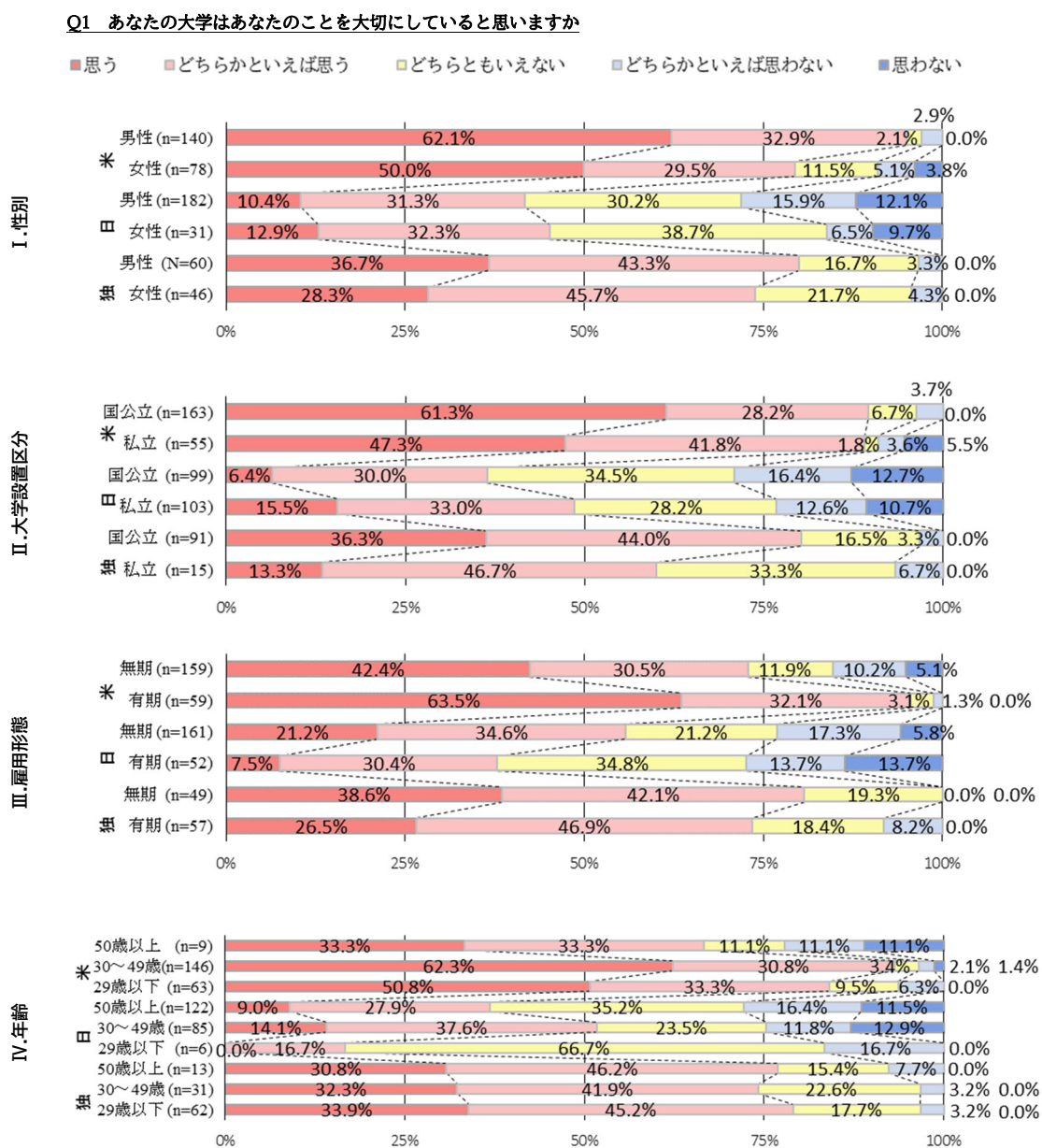


図 12 I～IV 【教員】 Q1 あなたの大学はあなたのことを大切にしていますか

Q2 あなたの大学にはあなたが助けを求めることができるメンバーがいますか

Q2 (図 12) をみると、アメリカでは全区分において、助けを求めることができるメンバーが「いる」または「どちらかといえばいる」の合計が80%を超えているが、日本ではおおむね50~60%であり、他国に比べ否定的な回答の割合が高い。年齢比較では、3か国ともに50歳以上の教員の「いない」の回答がやや多く、各国に共通してベテラン教員になると頼れる先が少なくなることがうかがえる。また、ドイツの私立大学では、国公立大学に比べ「いる」の割合が少なかったが、アメリカと日本では私立と国公立の間に大きな違いはみられなかった。

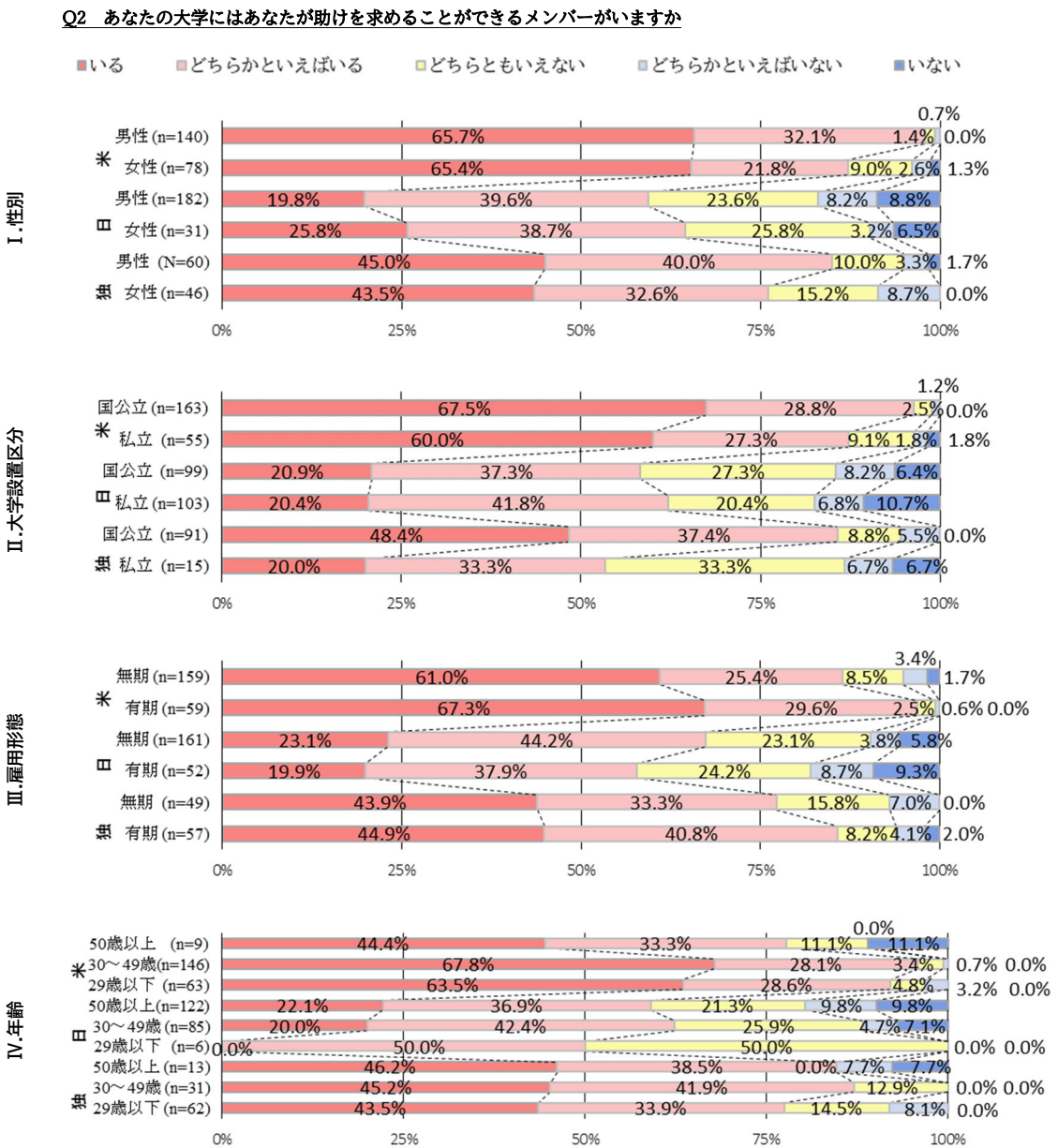


図 13 I~IV 【教員】 Q2 あなたの大学にはあなたが助けを求めることができるメンバーがいますか

Q3 あなたは大学で活躍したいですか

Q3 (図 14) では、3 か国とも多くの回答者が活躍「したい」または「どちらかといえばしたい」を選じた。ドイツの私立大学および 50 歳以上の 2 区分でのみ、肯定的な回答が 5 割を切り、「したくない」が 10%を超えたが、おおむね否定的な回答は少なかった。特に、日本の女性教員をみると、「したくない」または「どちらかといえばしたくない」のいずれの回答も 0%であり、活躍に関して否定的回答がまったくない唯一の区分となった。また、日本の有期雇用教員の「したい」の割合は、無期雇用教員に比べ低くなっているが、アメリカでは逆に無期雇用教員で活躍意欲が高い。この傾向は、Q1 の大切にされているか否かの回答と類似しており、両国の有期雇用教員の意識について考察の余地がある。

Q3 あなたは大学で活躍したいですか

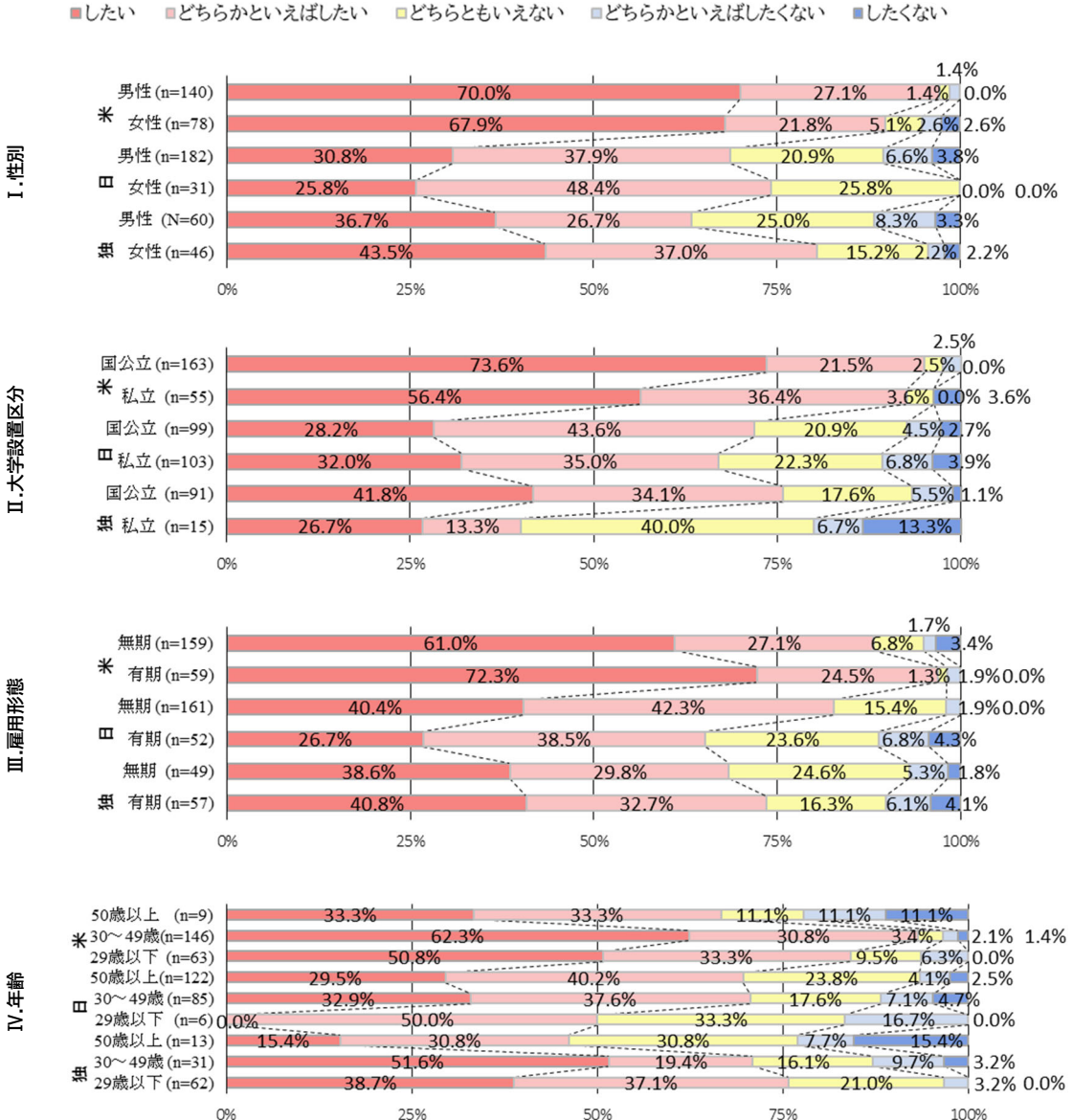


図 14 I~IV 【教員】あなたは大学で活躍したいですか

Q4 あなたのスキルや能力はあなたの大学で評価されていますか

評価についての質問 Q4 (図 14) では、ドイツやアメリカに比べ、日本で「されている」の回答が顕著に低かった。「されていない」や「あまりされていない」の回答も多く、他国に比べ、大学の能力評価について肯定的に捉えている日本の教員が少ないことがみてとれる。なお、日本でも 29 歳以下の教員でのみ、否定的回答が 0%であったが、標本数が少ないことと、Q1~Q4 すべてを通して極端な回答を避ける傾向があったことから、解釈には注意が必要である。

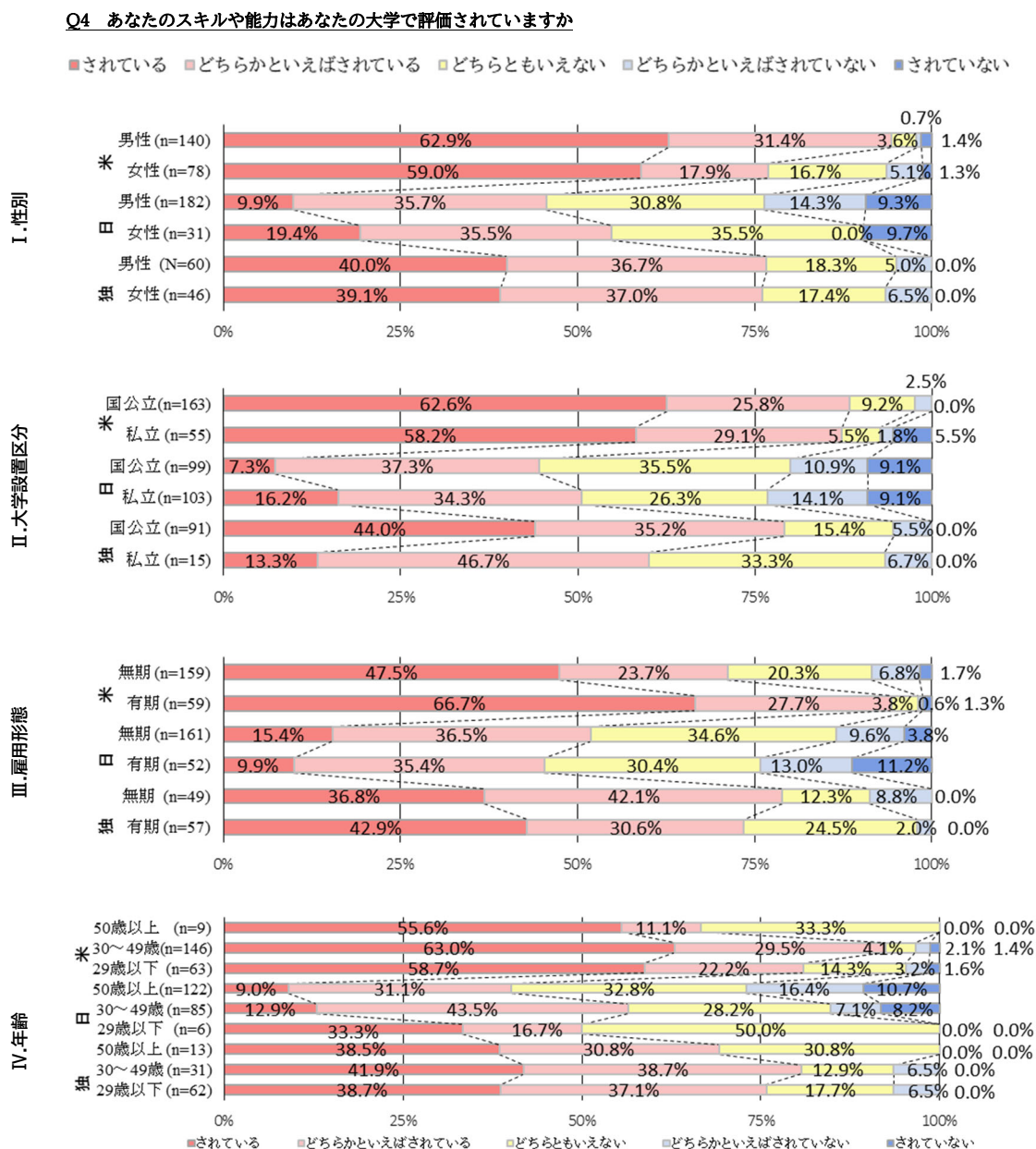


図 15 I~IV 【教員】あなたのスキルや能力はあなたの大学で評価されていますか

2.1.2 所属大学の取り組みに関する質問

Q5 あなたの大学は以下の取り組みを積極的に行っていると思いますか

Q5 の各項目への大学の取り組みについて、各国の大学の設置区分ごとの回答を比較する（図 16）。

日本をみると、全項目で他国に比べ「思う」が少なく、「どちらともいえない」「わからない」が多い傾向が強い。また、私立と国公立の比較では、障がい者支援での「思う」や、ジェンダー平等の「思わない」の割合が私立でやや多いものの、全体的に設置区分による大きな違いはみられない。

一方、アメリカでは、LGBTQ 支援以外の「思う」の回答で、国公立が私立を 15 から 20 ポイント上回っている。同時に、「思わない」の回答の割合も私立で 10 ポイント程度多いことから、アメリカの私立大学と国公立大学では、教員が感じるダイバーシティ支援の取り組みに違いがあることがわかる。

ドイツでも、全項目とも「思う」の回答が私立大学でやや低いが、特定の傾向はみられなかった。

Q5 あなたの大学は以下の取り組みを積極的に行っていると思いますか

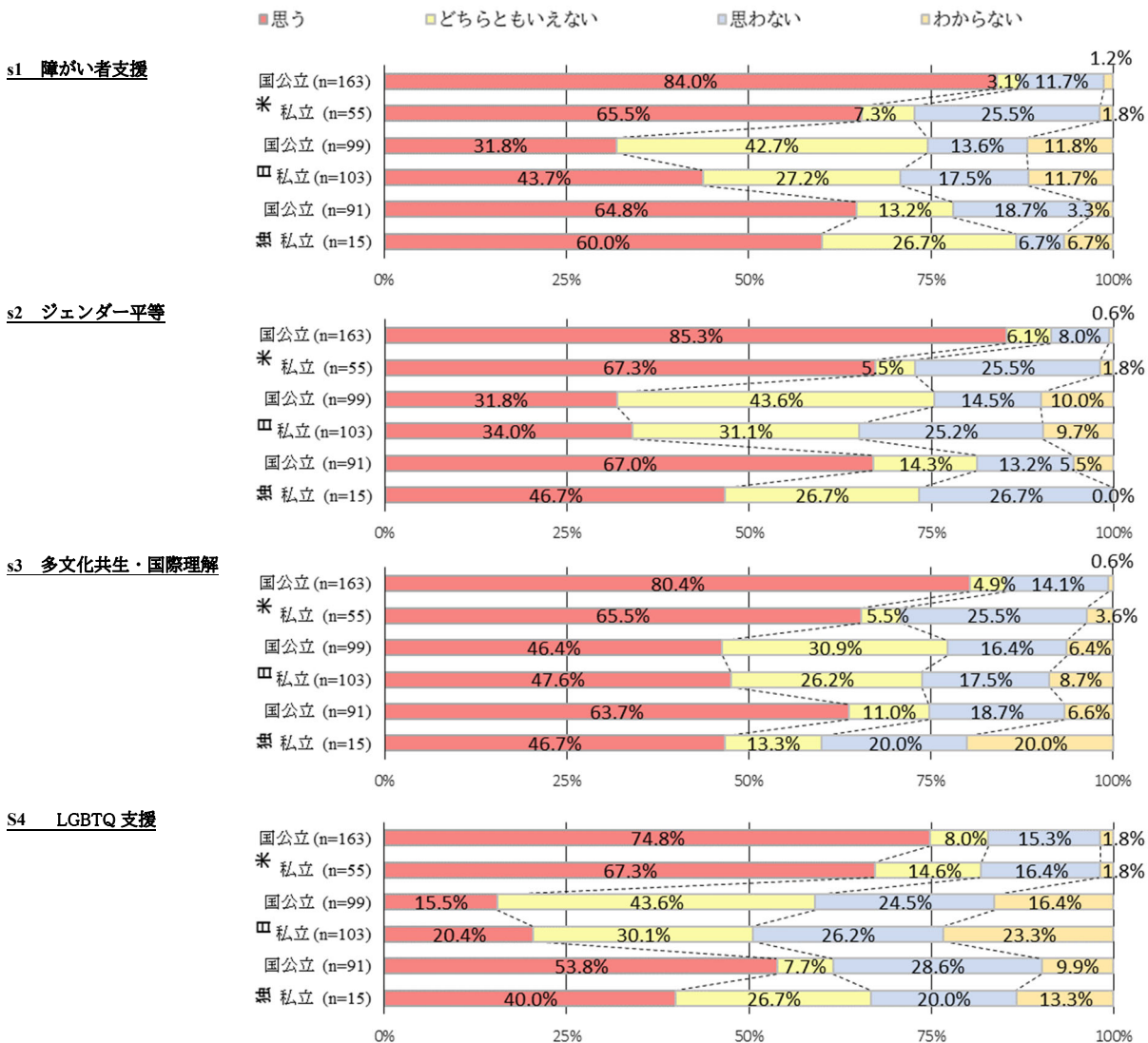


図 16 【教員】あなたの大学は以下の取り組みを積極的に行っていると思いますか

2.1.3 支援の重要性に関する質問

Q6 あなたは、大学が以下の取り組みを行うことはどれくらい重要だと思いますか

Q6の各項目は、学生と教職員それぞれについて、障がい者支援（s2、s1）、ジェンダー平等（s7、s8）、多文化共生・国際理解（s5、s6）、LGBTQ支援（s3、s4）に分類できる。ここでは、設問番号とは独立に上記の分類に沿って、各国の性別と設置区分ごとの回答を比較する。

障がい者支援

障がいのある学生（図 17）または教員（図 18）に対するサポートの重要性については、どの国でも「重要」と「どちらかといえば重要」が回答の大半を占めている。

日本では、性別および設置区分の間で顕著な違いはみられない。アメリカとドイツでは、障がいのある学生支援の「重要」の割合が、男性に比べ女性で20ポイント以上高い。なお、ドイツの私立大学では、やや否定的な割合が目立つが、国立に比べ標本数が少ないため、明確な特徴があるとはいえない。

また、図 17. I と図 18. I を比べると、3 か国ともに「教職員のサポート」に比べ、「学生のサポート」に肯定的な回答が多くなっていることから、各国教員の学生に対する意識の高さを感じとれる。

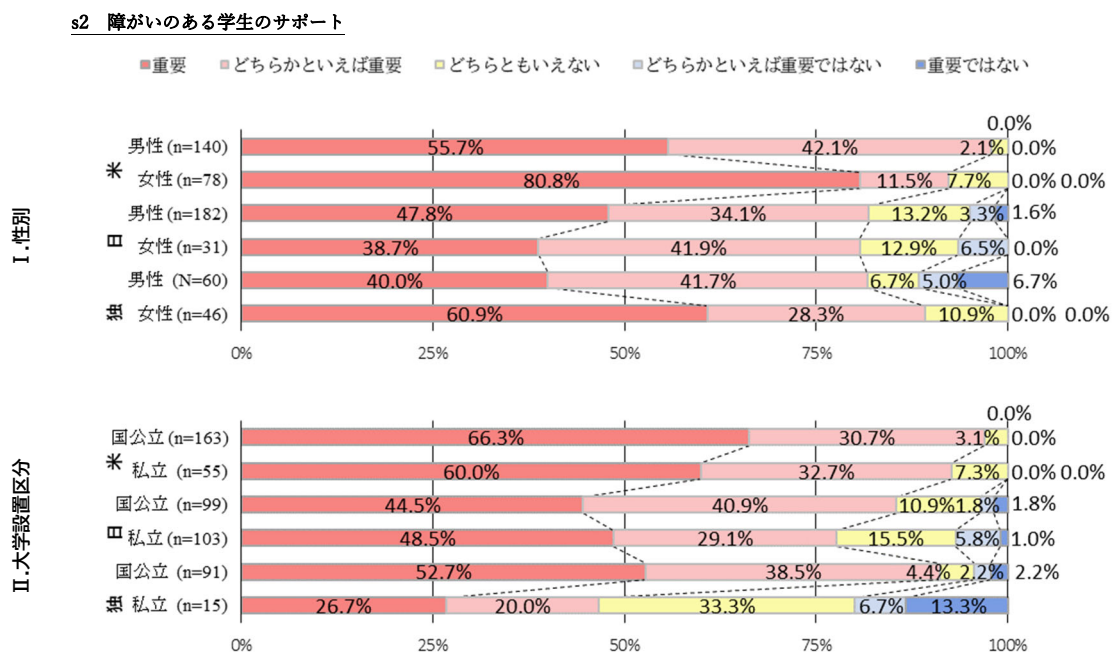


図 17 【教員】 Q6 s2 障がいのある学生のサポートの重要性

s1 障がいのある教職員のサポート

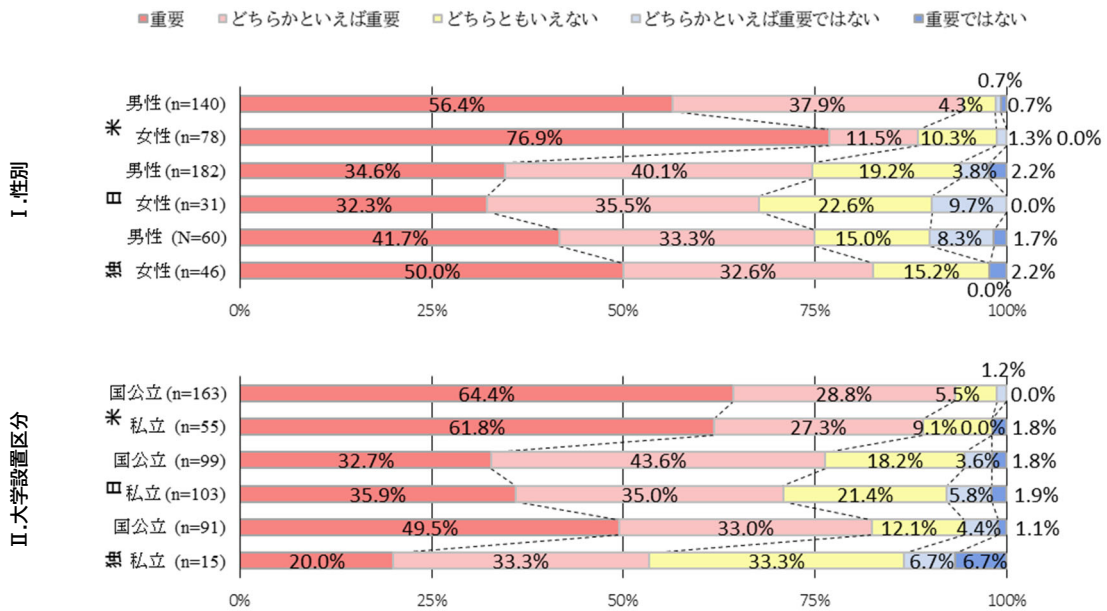


図 18 【教員】 Q6 s1 障がいのある教職員のサポートの重要性

ジェンダー平等

女子学生の活躍推進（図 19）および女性研究者の活躍推進（図 20）についても、全体として否定的な回答は少数であった。

各国性別ごとの回答を比較すると、アメリカとドイツでは女子学生支援について「重要」と回答した女性が、男性を約 20 ポイント上回っているのに対し、日本では女性教員の「重要」が男性教員をわずかに下回っている。一方、女性研究者支援については、日本でも「重要」と答えた女性が男性を上回った。ただし、「重要」と「どちらかといえば重要」を合わせた割合では、アメリカの男性が女性より大きくなっている。

設置区分で比較すると、日本の私立大学では、女子学生支援、女性研究者支援ともに、国公立に比べ「重要」が 10 ポイント以上多かった。ドイツの私立大学では、障がい者支援と同様、割合が他の区分と異なるが、明確な偏りがあるとはいえない。また、障がい学生支援に比べ女子学生支援で否定的な意見がない等、同区分内での比較の余地はあるが、標本数を考慮して以降は議論を割愛する。

s7 女子学生の活躍推進

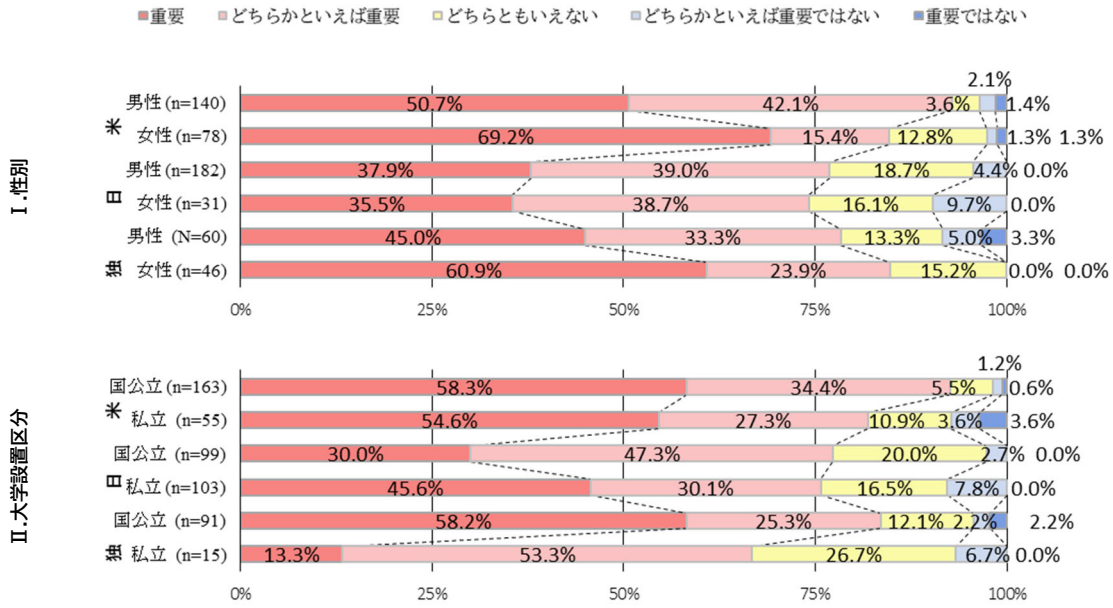


図 19【教員】 Q6 s7 女子学生の活躍推進の重要性

s8 女性研究者の活躍推進

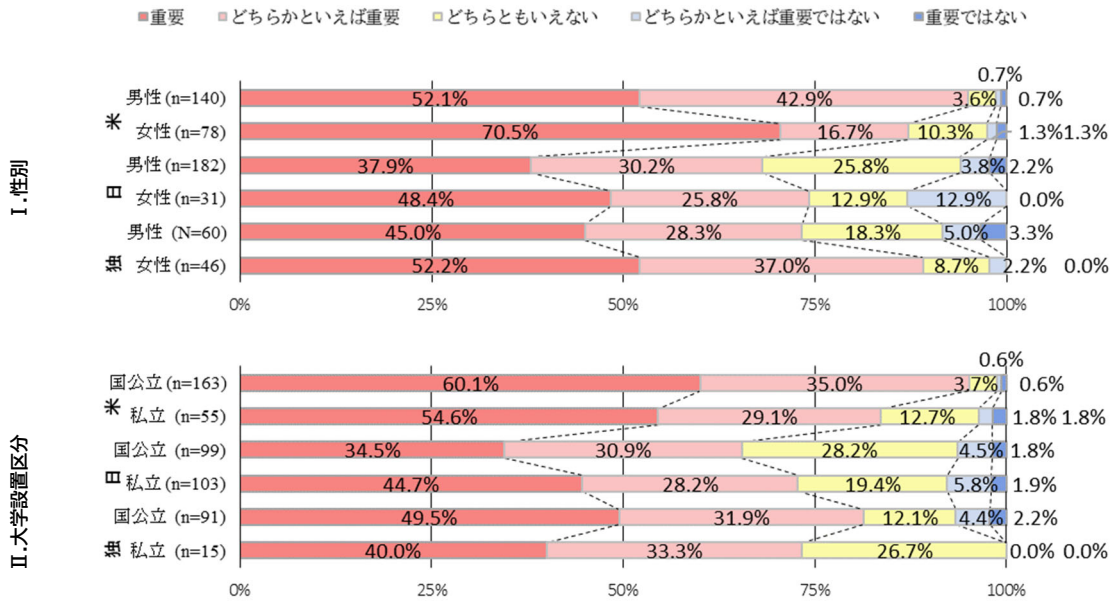


図 20 教員】 Q6 s7 女性研究者の活躍推進の重要性

多文化共生・国際理解

異なる国籍、人種の学生同士の交流（図 21）および教職員同士の協働（図 22）についても、全体として否定的な回答は少なかった。特に人種問題に関心が高いといわれるアメリカでは、9 割以上が「重要」もしくは「どちらかといえば重要」の肯定的な回答であった。日本でも、肯定的な回答の合計において男女間の差はほとんどなく、私立と国立にも大きな相違点はみられなかった。

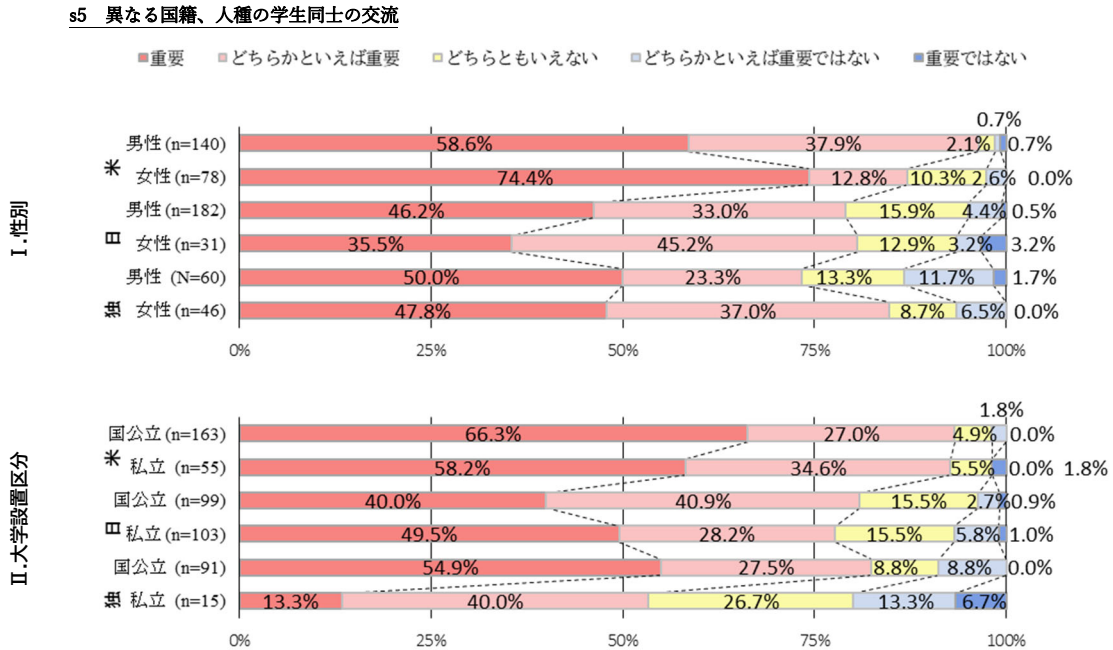


図 21 【教員】 Q6 s5 異なる国籍、人種の学生同士の交流の重要性

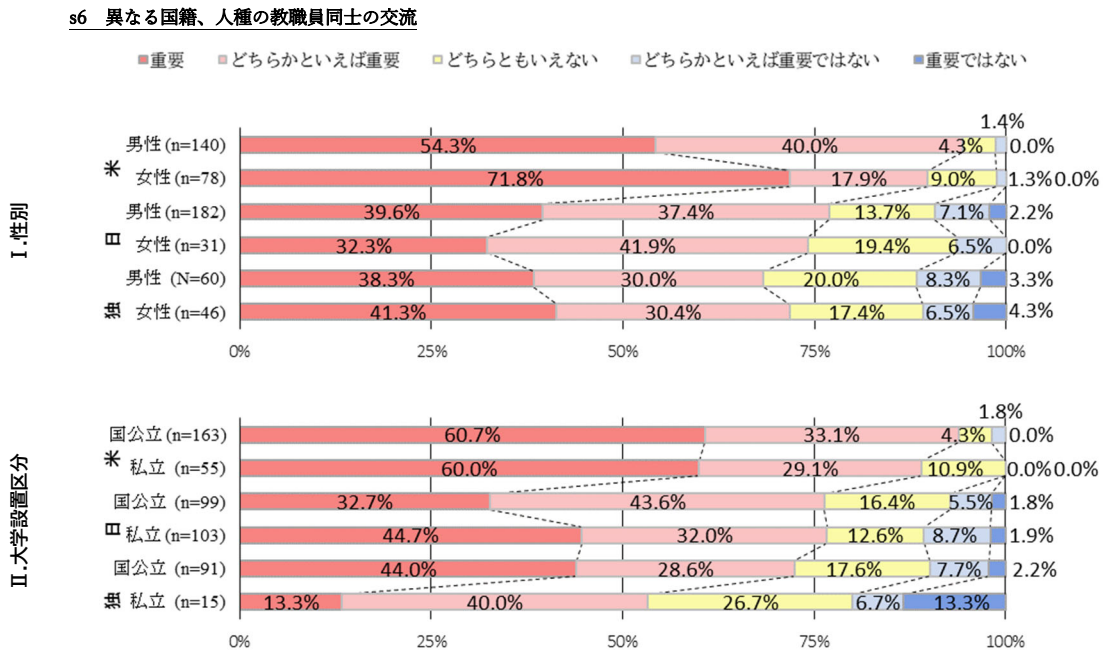


図 22 【教員】 Q6 s6 異なる国籍、人種の教職員同士の協働の重要性

LGBTQ 支援

LGBTQ の学生 (図 23) および教職員 (図 24) のサポートについても、おおむね肯定的な回答が多かったが、女性支援や多文化共生支援に比べると、やや否定的な回答の割合が目立っている。特にドイツ男性では、LGBTQ の教職員支援について「重要」と「どちらかといえば重要」を合計しても 50%を切っており、他の 3 区分とは異なる分布がみられた。

S3 LGBTQ の学生のサポート

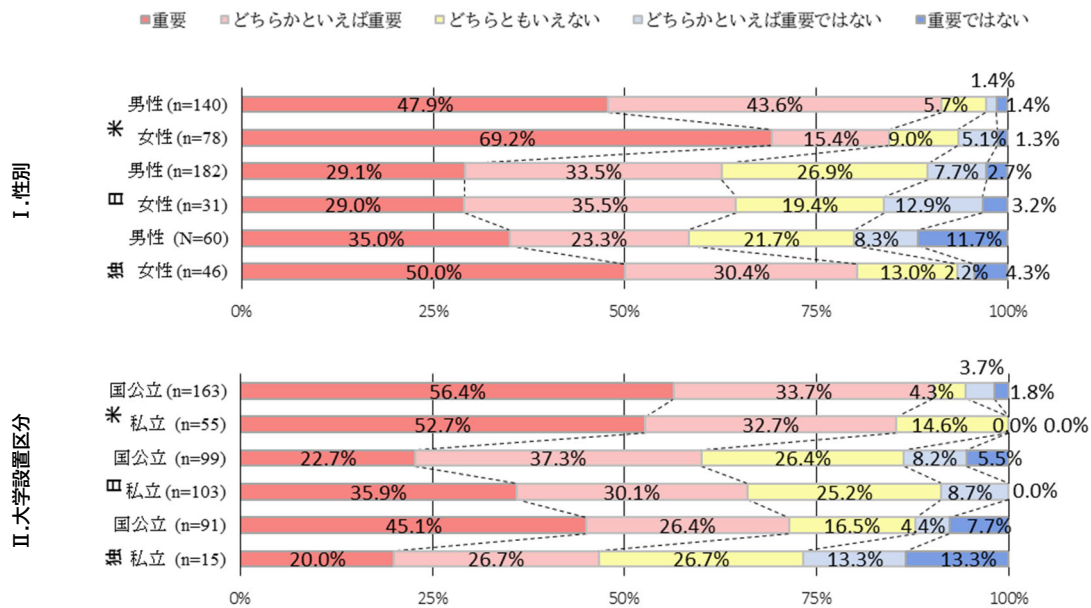


図 23 【教員】 Q6 s3 LGBTQ の学生のサポートの重要性

s4 LGBTQ の教職員のサポート

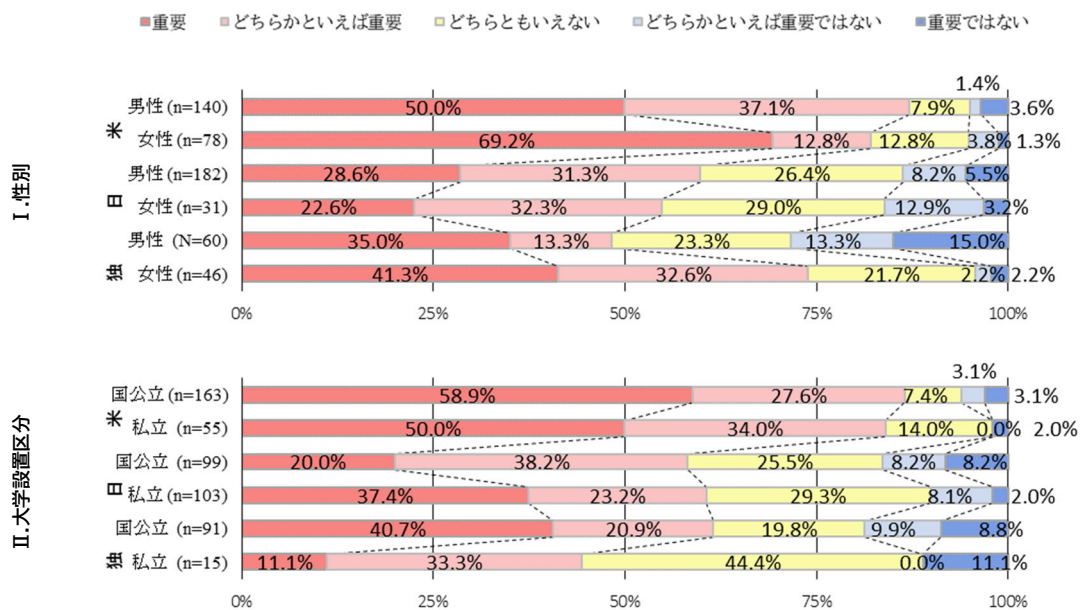


図 24 【教員】 Q6 s4 LGBTQ の教職員のサポートの重要性

2.2 学生の回答の国際比較

参考のため、学部生および大学院生についても各回答を概観する。なお、Q4「あなたのスキルや能力はあなたの大学で評価されていますか」は、大学において試験等で評価を受ける学生に対しては観点の異なる質問であるため、分析を割愛する。Q5の所属大学の取り組みに関する質問についても、学生と教員それぞれの見解を比較することは今回の本旨ではないことから、教員のみでの分析とした。また、同様の理由で、Q6においても学生に関する項目のみを掲載する。

Q1 あなたの大学はあなたのことを大切にしていますか

Q1 (図 25) については、教員の回答と同様、独米に比べて日本でやや肯定的な回答が少ないが、全体として各区分間に大きな特徴はみられない。

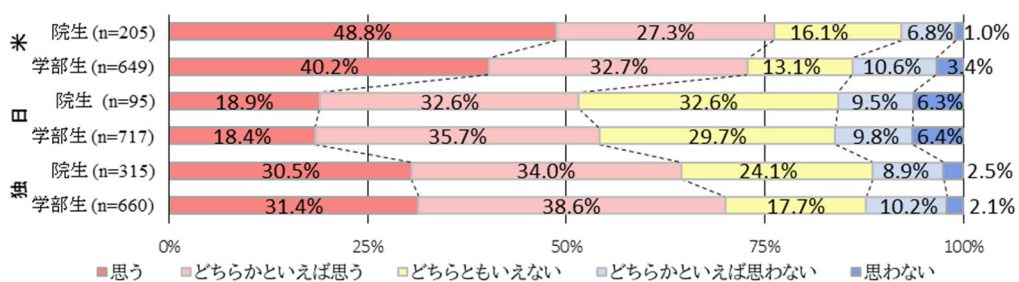


図 25 【学生】 Q1 あなたの大学はあなたのことを大切にしていますか

Q2 あなたの大学にはあなたが助けを求めることができるメンバーがいますか

Q2 (図 26) についても、特に独米で Q1 を上回る割合で肯定的な回答が多かった。日本では「どちらともいえない」が多く、「いない」および「どちらかといえばいない」を合計した割合も他国に比べ 2 倍近くとなっている。

また、一般に学生には、学内に同級生や学生担当の職員、指導教員などがおり、教員に比べて頼ることのできる先が多いと考えられる。しかし、各国学生の回答の割合は、同じ質問に対する教員の回答 (図 12) とほぼ同じであった。つまり、教員と学生間の差異や属性間の差よりも、国ごとの傾向の違いが強く表れた結果であることがわかる。

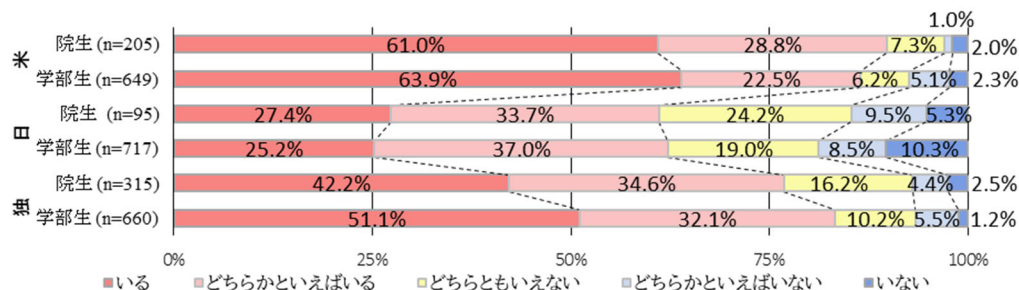


図 26 【学生】 Q2 あなたの大学にはあなたが助けを求めることができるメンバーがいますか

Q3 あなたは大学で活躍したいですか

活躍に関する質問 Q3 (図 27) については、各国で割合の違いはあるが、3 か国に共通して大学院生の「したい」が学部生を上回った。肯定的な回答の合計でも、各国大学院生で割合が大きくなっており、上級課程に進む学生は「大学での活躍」を意識していることがうかがえる。

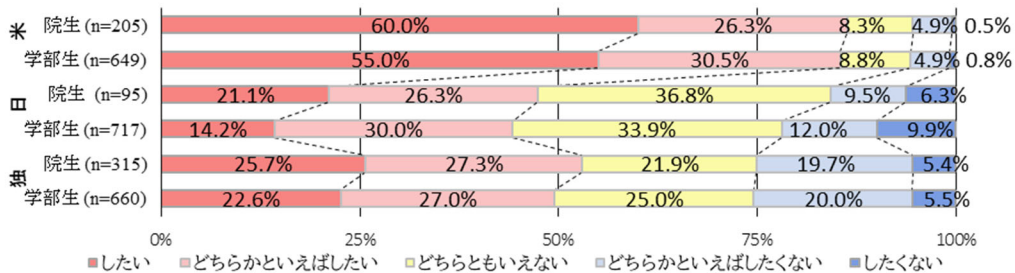


図 27 【学生】 Q3 あなたは大学で活躍したいですか

Q6 あなたは、大学が以下の取り組みを行うことはどれくらい重要だと思いますか

障がいのある学生のサポート (図 28)、女子学生の活躍支援 (図 29)、異なる国籍、人種の学生同士の交流 (図 30)、LGBTQ の学生のサポート (図 31) の各項目の重要性についても、アメリカ、ドイツ、日本の順に肯定的回答が多く、国ごとの傾向が顕著である。いずれの項目でも、学生と大学院生の方に大きな差はみとめられない。LGBTQ 項目のみ他より否定的な回答が目立つ点も、教員の回答と類似した結果となった。

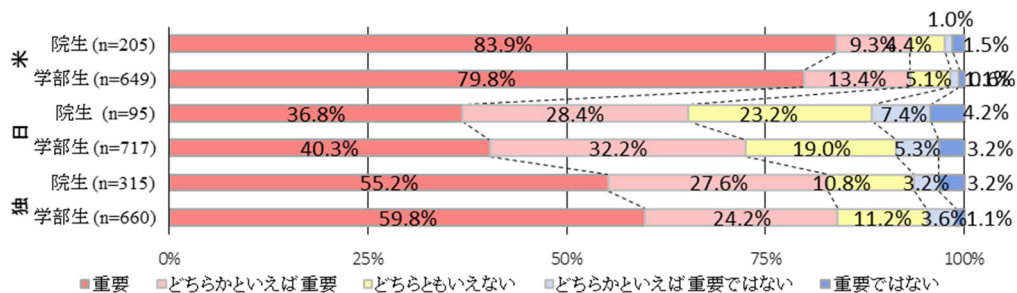


図 28 【学生】 Q6 s2 障がいのある学生のサポートの重要性

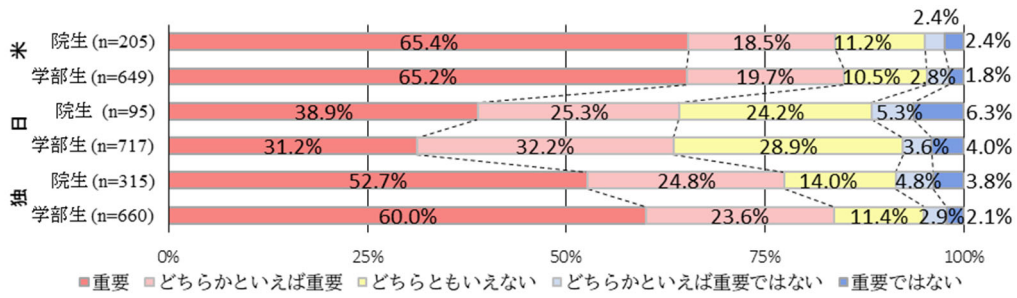


図 29 【学生】 Q6 s7 女子学生の活躍推進

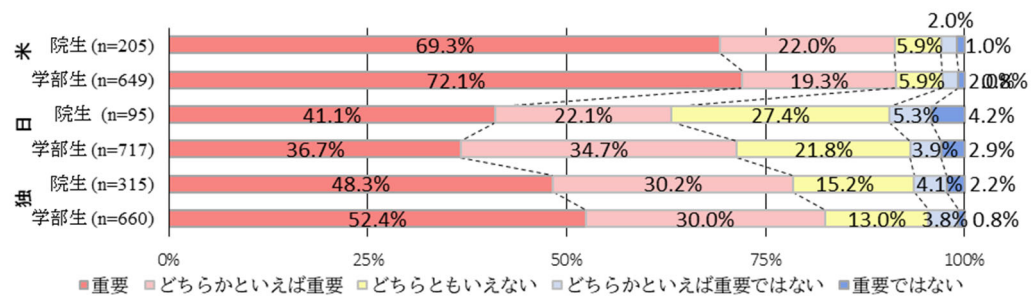


図 30 【学生】 Q6 s5 異なる国籍、人種の学生同士の交流

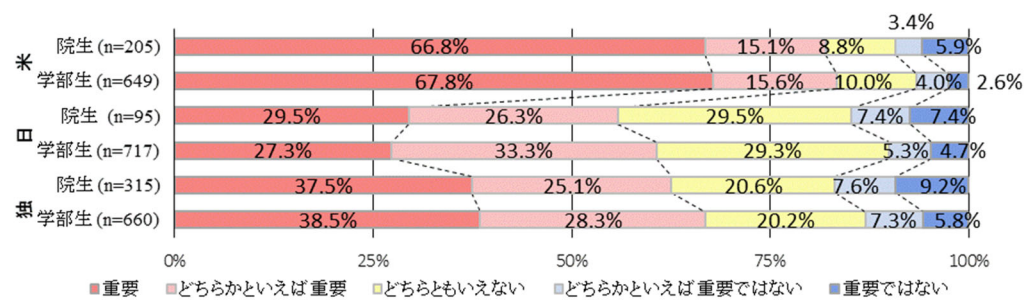


図 31 【学生】 Q6 s3 LGBTQの学生のサポート